

ジャンルの生成と変容
— 「間テクスト性」から見たる「マカーマート」

岡崎 桂二

四天王寺国際仏教大学紀要

第40号

2005年9月

(抜刷)

ジャンルの生成と変容

— 「間テキスト性」から見たる「マカーマート」

岡 崎 桂 二

(平成17年3月31日 提出)

どのようなテキストもさまざまな引用のモザイクとして形成され、テキストはすべて、もう一つの別なテキストの吸収と変形にほかならない。
(J. クリステヴァ『セメイオチケ』)

ハマザーニーが創始し、ハリーリーによって完成されたとするマカーマートに関する研究は、専らマカーマートの語義詮索と、ハマザーニーが依拠したと思われる材源探索に向けられてきた。前者に関しては、リチャーズの明解な説明で決着がついたが、後者においては、ザキー・ムバーラクがハマザーニーの独創性を否定し、イブン・ドライドを新たなジャンル開拓者に擬したが、この新説も完全に否定されて、マカーマート・ジャンルの生成研究は再び隘路に入り込んでしまっている。

本稿は現段階におけるマカーマートの生成研究のこのような閉塞状況を、「間テキスト性」の理論を援用して打破しようとするものである。作品理解における作者の特権的な位置が否定されるとともに、作者の創造性に対する素朴な信仰もまた失われた現代において、作者を取り巻く言説空間の解明こそが、あるジャンルの生成、発展理解の鍵を占めていると思われる。

本稿ではまずハマザーニーと同時代のアラビア語文学環境を考察し、次にハリーリーによるジャンル定着の意義を探り、さらにハマザーニー以前の言説空間を探求する。そして最後に近代におけるマカーマート・ジャンルの変容の意義を考えたい。

キーワード：マカーマート、間テキスト性、ハマザーニー、ハリーリー、マアッリー、イブン・ブトラーン

1. 初めに (マカーマート研究と間テキスト性)

今に到るも詩歌優勢のアラブ文化において、ハリーリーの『マカーマート』は散文文学に新しいジャンルを確立したのみならず、そのテキストはアラビア語著作の模範とされた。ために、文化人(アディーブ)や書記官僚(カーティブ)たちは競ってその模倣に走り、徒に修辞を鏤め、技巧を凝らした文章を作り上げた。このような影響は現代にまで及んでおり、マンネリズムと化したマカ

マート垂流の文体は、荘重ではあるが内容空疎な演説や書物の序文に用い続けられている¹。かくのごとくアラビア語表現を定式化し、その変化を決定づけたマカーマートに対する研究者の関心は、専らマカーマートという語の意味詮索と、前例無比とされたこの作品の出自を問うことに向けられた²。

マカーマートの語義に関しては、リチャーズが明解な解釈を示して長い論争に決着をつけた³。

他方、マカーマートの起源をめぐる論議は今なお続けられており、研究者間で未だに意見の一致を得ていない。近代において、この論争に先鞭をつけたのはザキー・ムバーラクであったが、彼はそれまで通説とされてきたハマザーニー（969年～1008年）の独創性を否定し、彼に先行するイブン・ドライド（924年没）をマカーマート・ジャンルの創始者に擬した。ムバーラクは、フスリー（1022年没）の『アダブの精華Zahr al-Ādāb』中の記述を基にして、ハマザーニーはイブン・ドライドが既に発表していた40の話（ハディース）に倣って、物乞い（kudya）をテーマとする400のマカーマを書いたのだ、と主張した。さらにムバーラクは、イブン・ドライドの40話の痕跡をカーリー（901年～967年）著の『口述集 al-Amāli』に見つけ出すことができたとも主張した⁴。残念ながら、ムバーラクの新発見は既にプレンダーガストやマルゴリウスによって指摘されている事実であり、発見したとするイブン・ドライドの当該作品は、発想、構造、文体、の各面において、ハマザーニー作品とは著しい相違があり、ハマザーニーがモデルと仰いだ作品とは見なされえない⁵。現在ではムバーラクの説はほぼ完全に否定されており、「マカーマート」というアラブ文学における新ジャンル創設者の栄誉は、再びハマザーニーに冠されることとなった。しかしながら、ハマザーニーがどのようなものに触発され、いかにしてこの新しいジャンルの着想を得たのかは依然として謎に包まれている。彼が依拠したとされる材源探しや、影響を受けたと考えられるテキストを特定する作業は徒勞に終わっている。

このような閉塞的な状況下にあるマカーマート研究において、本稿は、近來の「間テキスト性 inter-textuality」の概念を援用して、マカーマート・ジャンルがいかにして誕生し、どのようにアラブ文化の中で確立されていったのか、さらに近

代に到っていかなる変容を遂げたのかを考察しようとするものである。この作業は従來の古典的な影響研究、源泉研究とは明白に一線を画するものである⁶。

「間テキスト性」の理論に従えば、いかにエポックメイキングな作品であったとしても、その誕生は一人の天才の想像力に帰せられるものではなく、その作品に前後するあらゆるテキストの引用のモザイクとして構築されているのである。つまりテキストはすべて、もう一つ別の、あるいは複数の、テキストを吸収、変形したものである、と考えられている⁷。「書く」という行為は、決して無から何かを生じさせるような行為ではない。たとえ前代未聞の独創的な作風と呼ばれるものであっても、そこには既に他の様々な場所で実現されてしまっている（もしくは実現されつつある、あるいは実現されるであろう）ありとあらゆる書きかたのようなものが影を落としているのだ。それは明らかに影響とは別次元の問題である」⁸。このような「間テキスト性」の基本的な理論は、マカーマート・ジャンルの生成・変容の謎の解明に有用と思われる。従來、ハマザーニーが影響を受けたとされる特定のテキスト探索は不成功に終わっているが、その作業の根底には作者の独創性に対する素朴な信頼が横たわっていたと考えられる。しかし、作者に死が宣告された現在、ハマザーニーのテキストをその作者から切り離し、広く文学環境の中に開放することにより、つまり、作者がどのような言説空間 discursive space に属していたのかを解明することで、マカーマート生成の過程が浮き上がってくるであろう。その意味において、まず、ハマザーニーと同時代のアラブ文学の環境がいかなるものであったかを考察する。

2. ジャンルの生成（同時代の文学環境）

ハマザーニーの『マカーマート』の成立事情が

不明な現段階において、その成立年代もまた確定できないが、彼の生誕時期（969年）からハリリーの生年（1122年）までのおおよそ150年間に、文体、形式、発想、の各面においてハマザーニー作品と類似した主要作品に、イブン・ブトラーン（1066年没）の『医師たちの宴会』、イブン・ナーキヤー（1020～1092年）の『マカーマート』、イブン・シュハイド（992年～1034年）の『二詩霊の書簡』、さらにマアッリー（1058年没）の『駿馬と騾馬の書簡』がある。それぞれ相互の影響関係なしに独自に制作されたと考えられているが、共に虚構性を前面に出したフィクショナルなものであり、娯楽性を意識した作品というハマザーニー作品と共通した特徴を持っている。それゆえこれら4作品は、イスナード（伝承経路）を付した逸話を内容とし、事実をありのままに伝えようとする叙述形式を基とするアダブ作品とは、著しく相違した作風を示している⁹。この事実は、文学作品が産出される背後にある、各時代に共通する言語・文学環境、言説空間の存在を指し示しているが、まず、各作品の特徴を概観してみよう。

イブン・ブトラーンはバクダッド近郊のカルフ生まれで、ネストリウス派のキリスト教徒であり、医師として活躍し、また文学にも精通しており、アレppo、エジプト、アンチオキヤ等、各地を旅して回った。エジプトでイブン・リドワーンと戦わせた医学論争で有名であるが、相手を変えて同様の論争を行っており、このような経験を基に『医師達の宴会』が創出されたものと考えられている¹⁰。

『医師達の宴会』は主人公たる語り手がマッヤーファーリーキーンの町に到着し、医師と自称したために当地の医師団の長老と出会い、その自宅に招かれるところから話が始まる。腹を空かせたこの偽医者の前にご馳走が並べられるが、吝嗇家（パヒール）の長老と、何とかして食にありつこ

うとする吝嗇者（トゥハイリー）との間に涙ぐましい攻防が始まり、アダブ物のトポスとなっているお決まりの場面が展開される¹¹。

イブン・ブトラーンは冒頭で自作を『『カリラとディムナ』に倣った書簡（リサーラ）である』と明言して、その虚構性を露わにし、従来のアダブ作品と明確に一線を画している¹²。アラブ散文学において想像力を駆使した虚構の作品は、言及されている『カリラとディムナ』（745年？成立）を嚆矢とするが、以後、ハリリーの時代（12世紀）に到ってもなおフィクショナルな作品に対する忌避感がアラブ・イスラム社会全般に広がっていた¹³。このような文学風土の中で『カリラとディムナ』のみが虚構の作品として受容されていたのは、この作品がペルシャ語からの翻訳書であってアラブの伝統から外れたものであるという意識と、物言わぬ動物を主人公とした擬人法を採用している点にあった¹⁴。このような虚構作品に対する強い忌避感への突破策として、ハマザーニーは架空のイスナード（伝承経路）を付すという方法を取り、他方、イブン・ブトラーンは動物寓意譚に倣っているという断り書きを記して弁明を図ったのである。

文体面では、一部に押韻が施されているが顕著なものではない。しかし、リサーラの伝統に則って、詩をふんだんに挿入し、パラレリズムを基調とする整然とした文章構造を持っている。

ハマザーニー作品との最も顕著な共通点として、題材と発想が挙げられる。食物を巡って、体面を繕うために提供したご馳走を客に食べられまいとする吝嗇家と、美辞を並べ、策を弄して食にありつこうとする吝嗇家の攻防というテーマはアダブ物のトポスになっており、ハマザーニーの「マディーラのマカーマ」はこのテーマの傑作と評価されている。言葉の洪水というサブ・テーマと、それを弁舌爽やかな主人公を設定することで

具体化させている趣向も両作品に共通している¹⁵。

イブン・ナーキヤーは生没ともにバグダードで、ほぼ無名に近い詩人であったが、10話の『マカーマ』を著した。この『マカーマート』は長らく埋もれたままであったが、1908年にHuartにより初めて学界に紹介された。しかしその覆刻されたテキストは錯簡が多く不完全のものであった。そして1912年にRescherが新しい校訂版を出したが、全10話のうちの7話しか収載されていない。ようやく1988年にḤasan ‘Abbāsにより、全10話のマカーマが収録された完全版が出版された¹⁶。このようにイブン・ナーキヤーの『マカーマート』は長らく忘れ去られたままであったが、マカーマート・ジャンルの生成に関して、重要な情報を提供してくれる。

イブン・ナーキヤーはその序文において、自作をヒカーヤと名づけているが、同時にマカーマートという語も使っている¹⁷。さらに各話の冒頭に「第～のマカーマ」と付されているところから、著者がハマザーニー作品を知っており、かつその影響下にあることが推測される。彼は序文で、この作品が聞き手 (sāmi‘) と語り手 (rāwī) を楽しませる娯楽目的のものであると明言し、さらに、主人公アルヤシュクリーが仮構の人物であることを記してこの作品の虚構性を明示するとともに、以下に開陳される話が恋愛詩や動物寓意譚に倣ったものであるという弁明を行う¹⁸。このように、序文において、虚構作品に対する非難への予防策を講じるのは、先述のイブン・ブトラーンと同じ理由によるもので、ハリリーに受け継がれて、以後、マカーマート作者の慣行として引き継がれていく。

イブン・ナーキヤーの『マカーマート』は、構造、形式、内容面でハマザーニー作品と共通した特徴を持っている。構造、形式面では、冒頭に架空の短いイスナードを付しており、その内容は語

り手が経験した事件を1人称で語る目撃譚、というハマザーニー作品と同様の体裁をとっている。しかし、性格が邪悪で、犯行が悪質なものであるという主人公像は、ハマザーニー作品の機知に富み、雄弁な主人公とは大いに隔たったものである。さらに、事件が常にバグダードで展開されること、各話毎に異なった語り手がいる2点において両作品は顕著な相違を見せている。だが、この複数の語り手という設定は、ハマザーニー作品に比して、語られる逸話の信憑性を一段と高める働きをしている。ハマザーニーの『マカーマート』の各話が、1話毎に完結して独立したものであるのか、あるいは全体としての統一性を有したものであるのかは議論されているところであるが、何れにせよ、全編を通して同一の語り手が主人公の犯行を語る、という形式が貫徹されている。この形式は、広大なイスラム地域を流浪する両者が、各地で邂逅する不自然さを生み出すとともに、語り手が同一人の犯行をなぜ見抜けられないのかという疑問をも生じさせて、逸話全体の信憑性を削ぐ結果に繋がる¹⁹。この隘路をイブン・ナーキヤーは語り手を複数設定することで突破した。

イブン・ナーキヤー作品の文体は、一部に押韻があるが全体に平板で、対句や比喩、修辞に乏しく、事実を坦々と叙述するアダブ物と通底する単調さである。しかしながら、タドミン *taḍmīn* と呼ばれる他の作品、特に『コーラン』、の引用を注記せずにテキストに挿入する技法を用いているのは、ハマザーニーと共通する執筆態度である²⁰。

かくして、イブン・ナーキヤーの『マカーマート』は、タイトルともども、そのフィクショナルな性質や構造・形式面で、アダブ物とは明白な相違を示し、ハマザーニー作品と酷似した特長を持つと結論づけられるであろう。

次いでマアッリーの『駿馬と騾馬の書簡』の考察に移る。マアッリーは若年に視力を失い、バグ

ダード等で文人として活躍するも、後半生を生まれ故郷であるアレppo近郊の小村で過ごし、思索に耽る隠棲生活を送った。彼は文人哲学者として令名を馳せ、韻文では『火打石の閃光』や『ルズーミーヤート』、散文ではダンテの『神曲』への影響が指摘されている『宥しの書簡』で名高い²¹。『駿馬と騾馬の書簡』は長らく題名が伝わるのみであったが、『宥しの書簡』研究で有名なアイシャ・アブドゥラフマーン（ビント・シャーティール）氏が、モロッコで写本を見つけて近年学界に紹介した作品である²²。マアッリーのこれら両書簡は、フィクショナルな散文作品であり、かつ動物の擬人的な表現方法が用いられていることや、文学・語学談義を内容とする、等の共通点を持つ。しかし、内容面から比較すると、『宥しの書簡』は主人公が冥界巡りをし、そこで遭遇した歴史上の人物と宗教、哲学を話題とする議論を展開する、宗教的、哲学的色彩が濃い作品であるのに対して、それより20年程前に書かれたと想定されている『駿馬と騾馬の書簡』は、『カーラとディムナ』に倣った動物寓意譚であり、処世術や人生訓に満ちた現実的な話題を内容としており、哲学や宗教的話題は少ない。そして、『駿馬と騾馬の書簡』においては、ストーリーに一貫性があり、しかも各話に緩急がつけられており、時にドラマチックな展開をみせる娯楽性の高い作品となっている。さらに、当時の世相や社会に対する辛辣な風刺や皮肉が込められている点においても、冥界巡りという幻想的な雰囲気をかもし出している『宥しの書簡』との相違点である²³。

『駿馬と騾馬の書簡』は、騾馬が鞍に繋がれ水汲みに従事している水飲み場に、駿馬がやって来る場面で始まる。駿馬は騾馬に向かって己の高い地位を自慢げに語り、アフタルを筆頭に、馬を主題としてアラブ人達が詠んだ詩の数々を朗誦する。それに対して騾馬は自己の惨めな立場と苦役

を嘆き、この不当な扱いを詩で描いて領主（アミール）に上訴するつもりだ、と計画を打ち明ける。しかし自分はこの場を動くこと叶わず、一体誰に上訴文を託すのか、という難題があると駿馬に話す。このようにして『カーラとディムナ』と同様の動物寓意譚形式で話が展開するが、動物界だけでストーリーが展開するのではなく、絶えず人間界との接触が行われているところに、この作品の新しさがある。そして、この導入部におけるアミールへの上訴文の作成と、誰を使者に仕立て上げるか、という二つのメインプロットにより、必然的に詩と散文の優劣や用語法を巡る文学談義、いかなる動物が使者に適正であるかの議論、というこの作品に通底する内容が決定されていく。

マアッリーは動物を擬人化する作品を、両書簡以外にも残している特異な作家であるが、この作品においても、表題の馬と騾馬以外に、鳩、駱駝、ハイエナ、狐、が共に議論を戦わすという擬人化がなされている。マアッリーがある程度『カーラとディムナ』に親しんでいたことは実証されている。しかし、偏愛とも称すべき動物の擬人化への執着の原点や、その着想の元は謎に包まれたままである²⁴。だがこれらの解答を作者個人の天才に帰す短慮は慎むべきである。本稿に即して重要なのは、アラブ文学の歴史においてフィクショナルな作品の可能性は、ハマザーニーが敢行した架空のイスナードを付すという大胆な方法か、あるいは『カーラとディムナ』に倣った動物寓意譚に倣うかの何れかの方法しか無かった点である。マアッリーの2作品は、豊かな想像性（＝創造性）を評価されている作家も、このような伝統に縛られていた一員であったことを改めて認識させてくれる。

文体面ではアラブ文法学に関する作者の深い造詣に基づき、同音異義語を駆使し、表裏二様に解

積可能な複雑な文章を作り上げた。この点においても『駿馬と驃馬の書簡』は、物語性に富み、韻文と散文を混交させ、バラレリズムを組み合わせた文体のハマザーニー作品との深い親縁性を示す。

またマアッリーの2作品がともに「書簡risāla」と題されていることも注目に値する。リサーラは本来書簡を表す語であり、現代語においてもその意味で用いられているが、やがて「公開・回覧を前提とした文」の意味が付加され、遂には特定の主題に関する「論文」の意味でも用いられるようになった。この論文においては内容そのものより、文中に盛り込まれている知識の量、つまり博識さが評価され、また論述よりも文章そのものの洗練度が問われるようになった。このようにして、文人（アディーブ）、書記官僚（カーティブ）たちは、自己の知識量と文章力を発揮する最適の手段として、競ってリサーラ（論文）執筆に勤しんだ。やがてジャーヒズが浩瀚な著作を著してこのジャンルの頂点を極めることになる。前述のようにハマザーニーもリサーラ作者として評価されており、名作家として令名を謳われていた。イブン・ナーキヤーがその『マカーマート』の序文で自作に言及してヒカーヤという語を用いていたことを考慮すれば、ハマザーニーやマアッリーの時代には「マカーマート」、「ヒカーヤ」「リサーラ」はそれぞれ交換可能な語彙であり、それらの境界線は厳密なものではなかった²⁵。

最後にアンダルシアで活躍したイブン・シュハイドは、ハマザーニーと面識があり、彼の『マカーマート』から引用を行っているのが確認されている。さらにイブン・シュハイドはマアッリーとの影響関係をも示唆されている。このようにしてイブン・シュハイドは先行する諸作品を元に『二詩霊の書簡』を書き上げた²⁶。この作品は主人公であり語り手の役をも務めるアブー・アーミル

（イブン・シュハイドのクンヤ）が、彼に宿り、彼に文学的生命力を吹き込むジン（ズハイル・ブン・ヌマイルという名が付けられている）に導かれてジンの住む世界を巡る内容となっている。ジャーヒリーヤ期にアラブ人は、各詩人（shā'ir）には文学的靈感を吹き込むジンが憑いているとの伝説を持ち、それゆえ詩人（shā'ir）は常人には感知できない超自然現象を察知できる（sha'ara）と信じていた²⁷。『二詩霊の書簡』はこのようなアラブの文学的伝統を背景にしている。

作品は4部（faṣl）に分かれており、主人公がジンに導かれて、順次、詩人（shu'arā'）、作家（kuttāb）、評論家（nuqqād）、動物（ḥayawān）、に関わるジンが住む世界を回遊し、文学談義を交わす内容となっている。この形式、内容から前述のマアッリーの2書簡との密接な関係を読み取るのは容易であるが、この両者の影響関係には未だ定説がない。しかし、イブン・シュハイドの著作の方が時間的にマアッリーに先行した、とする説に研究者の大勢は傾いている²⁸。いずれにせよ、アレppoとアンダルシアという地理的に隔たった所で、ほぼ同時期に同形式・同内容の作品が書かれた事実が重要である。この点もまた広くアラビア語世界に通底する言説空間を読み取ることができであろう。

またこのイブン・シュハイドの『二詩霊の書簡』においては、主人公がその回遊中にハマザーニーと遭遇する場面が描かれている²⁹。さらにこの作品に通底する詩人とそのジンとの邂逅というメイン・テーマは、ハマザーニーの『マカーマート』の第35話「イブリースのマカーマ」で既に扱われている。これらのことから、イブン・シュハイドとハマザーニーの間に、直接・間接の影響が想定できるが、確定的な証拠はない。しかし、われわれにとって重要なのは、テキストに描かれている共通した事実である。このように、イブン・シュ

ハイドはマアッリーとハマザーニーを繋ぐ核を占めている。

以上、ハマザーニーの没年よりハリリー作品出現による新たなジャンルが定着した時期までに、ハマザーニー作品と共通した特徴を持ち、それゆえ新たなジャンル生成の可能性を秘めた4作品の分析を行ってきたが、それらに共通する特徴を、①虚構のフィクションであり動物寓意譚を意識している、②文体面で洗練され、押韻したり、パラレリズム表現を用いる、③互いに共通のテーマ、プロットがある、とまとめることができよう。

これら4作品は互いに無関係に書かれ、その事実の一つの作品がいかにかその時代の共通した精神や感受性、つまり言説空間、に支配されているかの証左となっている。そして、ハマザーニー作品を含めたこれらの作品の各々は、その共通性により、何れもがアラビア語散文表現に新分野を開拓し、新しいジャンル創設者の栄誉を勝ち取る資格を有していたが、その栄冠がハマザーニーに帰せられたのは、彼の才能が傑出していたのではなく、偏にハリリーに拠る。この事実、間テキスト性が明らかにしたアンチ・クロノロジカルな影響を見て取ることができる。

3. ジャンルの確立 (ハリリーの功罪)

歴史的に先行する作品の後代に対する影響を問うことから脱却した間テキスト的な考え方からすれば、時代を逆転させたエリオット (1965年没) のシェイクスピア (1616年没) への影響を問題にすることも可能であり、その作業は文学研究において有意義なものとなろう³⁰。本稿に則して言うならば、この思考法は、ハリリー (1122年没) のハマザーニー (1008年没) への影響を問う方向へと我々を導いていく。つまり、前記4作品を押しつけて、マカーマート・ジャンルの創始者とし

て、歴史に名を残すようになったのはハマザーニー一人であり、またそのような結果をもたらすようになったのは、ハマザーニーの獨創性が他を凌駕していたからではなく、時間を逆転させた後続のハリリーの影響であった、と推論する際の有力な理論的根拠をこの思考法は与えてくれるのである。そのハリリーの影響力は、彼が自作に付した序文に負っていると考えられるので、まず、その序文の検討から始める。以下に序文の主要部分を訳出する³¹。

さて、今日では最早その名残の涼風も止み、また仄かな残り火も消え果てしまったが、そんなアダブの集いにおいて、かつてバディーウ・アッザマーン (時代の驚異)、つまりハマザーンの大学者のことだが、彼によって考案された (ibtada'a) 『マカーマート』が話題になっていた。バディーウ・アッザマーンはアブー・アルファトフ・アルイスカンダリーなる人物を借りてその作品を作りあげ、イーサー・ブヌ・ヒシャームを語り手とした。ところが、この両者はどちらも世間には全く知られていない無名の者で、素性も漠としており、どこの誰とも不明の人物である。だが、その下される御指示は絶対の命令であり、また服従するものの上ない名誉となるお方が、バディーウに倣って「マカーマート」を作っては如何か、という御意向をお示しになられた。(たとい、足を痛めた馬が頑丈な馬を追い越すことができないにせよ)。そこで、わずか二語でもって名言を作り上げ、たった二行で素晴らしい詩を拵えるあの人物の噂話を殿の耳に入れた。さらに、訳が分かれば分かる程当惑し、妄想ゆえについて道を誤るこの立場から免じて頂くようお願いをした。なにせ一旦その仕事を引き受けたならば、頭の

程度が試され、能力の限界が露になり、まるで暗闇の中で薪を拾い集める有様同様に、徒歩の者も騎馬駆けの兵士もごちゃごちゃに寄せ集める混乱状態に陥ること必定であったから。さらに、これまで口数の多い人間が無事だったことは無く、思わず口を滑らせてしまうと弁解は無用だ、ということも考慮にいった。

しかし、辞退に同意なさらず、また命令をも撤回なさらなかったのだから、忝く御意に従い、努力の限りを尽くしてお引き受けした。頭は固く凍りつき、知識も乏しく、また物事の判断もうまくつかなくなり、心配事も抱えていたが、何とか50の「マカーマ」を書きあげることができた。作品の中には真面目なもの(jidd)と冗談半分のもの(hazl)、精妙な言葉使用と力強い表現、選り抜いた真珠のごとき無類の雄弁さ(bayān)や古今無比の学識(adab)を駆使した文章、さらにコーランの章句と修辭を尽くし、アラブの諺やアダブを發揮した表現、文法に関する謎々を書き込み、言葉の規則、また、斬新な論文(risāla)、修辭を凝らした演説(khuṭba)、感動の涙を誘う説教(mawā'iz)、抱腹絶倒の冗句、とを書き込んだ。

これらすべてをアブー・ザイド・アッサーラーに語らせ、アルハーリス・ブヌ・ハッマーム・アルバスリーを逸話の伝え手に採用した。

度々、筆の運びを変えたが、全ては読み手を元気にさせ、また後に従う者の数を増やさんがためである。他人の詩句を引いたのは「フルワーンのマカーマ」で用いた2行と、「カラジのマカーマ」の別離の場面で使った2句のみ、文中の残りの詩は全て、作者たるこの私が筆を染めたものであり、その良きも

悪しきも書き手の故、それと言うのも、パディウこそ我が目標とする人物であり、また奇跡を起こした張本人であると認めればこそ、よし、クダーマ(ブヌ・ジャアファル)の雄弁さを備えたとしても、「マカーマ」に手を出すものはみな、そのおこぼれの雫を掬いあげ、彼の踏み固めた跡を辿るのみ。

.....

しかし、無知や無知を装う悪意に満ちた者から逃れることは叶わぬであろう。輩はこの作品ゆえに私を貶め、法に背くと非難を浴びせ続けるであろう。だが、英知を尽くして考察し、物事の道理を見極める人士ならば、きっとこの『マカーマート』を、世に役立つ書物であり、動物や口利かぬものたちの諭え話と同種類とみなすであろう。さればこそ、このような(有用な)話(hikāya)に耳塞ぎ、時にこの話を語る人を非難するものなど噂にすら聞かない。また、人の行いはその意図に応じて良し悪しを判断され、そこに宗教的な効果が望まれるときに、一体誰が、教えを広め、人を諭すために一書を物した人物に、いかなる咎有りとなされるであろうか。まして見栄を張り、嘘を広める意図など毛頭ないのであるから。この作者こそ主の教えに従い、正しき道を歩むものではなからうか。

マカーマートというアラブ文学における新しいジャンルを確定し、また後世に多大の影響を与えることになるこの序文から、以下の諸点を読み取ることができよう。

- ① ハマザーニーが創始者であることを認め、彼の能力を最大限に評価し、その創作法を踏襲した。
- ② 動物寓意譚と同様の教化目的の著作である。
- ③ 自身の乏しい才能を自覚し、作業の困難を

予測して固辞したが、命令に抗しきれなかった。

- ④ ハマザーニーとは異なって、作品中の詩の大部分は自作のものである。
- ⑤ 即興の口述ではなく、執筆されたもので、作品の数（マカーマ数）は50である。

そして、この序文によりハマザーニーの名は不朽のものとなったが、皮肉にも作品そのものはより完成度の高いハリリー作品の下に埋もれることとなった。つまり、ハリリー作品が世に出た後では、受容者（＝読者）はハリリーのマカーマートを基準として、同ジャンルに属する作品の評価を下すのである。人々は最早ハリリーの名や作品を思い浮かべることなしに、他の作品に接することができなくなったのである。これこそ間テキスト性が明らかにした時代を逆転した影響効果である。従来、文学作品の影響研究はクロノロジカルな関係に則って、ある先行作品の後続作品への影響のみを対象としていたが、「間テキスト性」の議論では、そのような時間的な制限は撤廃され、時間的な関係に基づく作品間の審級は無化される³²。つまり、「間テキスト性」に則れば、同時代の複数テキスト間の関係や、時代を逆転した影響関係の考察も可能なのである。ハリリー作品とハマザーニー作品との関係も、「間テキスト性」が示すアンチ・クロノロジカルな影響下にあると見なしうるであろう。その両作品の比較は後ほど行うとして、まず、この序文の持つ意義を考察しよう。

ハリリーはマカーマート執筆の動機が自発的なものではなく、命令に服したものであると述べ、さらに、叙述目的が娯楽目的ではなく、動物寓意譚と同様に、人々を教化し、教訓を与えるためであると、慎重に予防線を張り巡らす。やがてこのような弁解じみた序文を付すのが、後代のマカーマート作者に踏襲されていく³³。このことは、12

世紀においてもなおフィクショナルな著作に対する忌避感が社会全体に根強く残っていたことを示す。その隘路を抜け出すには『カリーラとディムナ』のごとき物言わぬ動物や、人に非らざる存在（ジン）を主人公に設定するか（マアッリー、イブン・シュハイド）、架空の人物名を借りてイスナードを付し、アダブ作品の逸話の体裁をとる（イブン・ブトラーン、イブン・ナーキヤー）しか方法は無かった。このような大胆な方策を見つけ出したところにハマザーニーと前記4作者の最大の功績があったのだが、歴史に名を残したのはハマザーニー一人であり、それは偏にハリリーのこの序文に起因する。

次いで、ハマザーニーの才能を最大限に称揚し、翻って自己の能力を卑下するその謙遜ぶりとは異なって、ハリリーは自作の特徴が作品中に置かれた詩歌にあるとし、自身の詩作能力を公然と誇っている。客観的に判断して、この点に関してはハリリーの主張には十分の根拠があると思われる。既に別稿で明らかにしたごとく、ハマザーニーとハリリーのテキストを比較すれば、以下のような顕著な相違があった。つまり、後者において、①各マカーマにおける形式が整い、構造、人物関係が一定不変であり、さらに、全編を通してストーリーが首尾一貫している、②押韻の徹底、複雑なパラレリズムの駆使、等文体的に洗練度を増している、③文章が量的に増大しており、特に挿入されている詩の部分が飛躍的に増えている、④マカーマート全体に統一性が認められるが、逆に、このことが単調性を生み出し、ハマザーニー作品が含んでいた豊かな物語性が失われている³⁴。

このような相違がある両作品を、文人や書記官僚を主体とする知識人たちが読み比べた場合、その知識増大という読書目的からして、彼らは挙ってハリリー作品に軍配を上げ、彼の作品をアラブ散文の精華と見なした³⁵。彼らはハリリー作

品に注釈を付け、そのテキストに仕掛けられた謎解きという知的ゲームに参加し、ハリリー作品をモデルにマーカーマートに筆を染めるようになった³⁶。

このようにして、ハリリーの『マーカーマート』序文はハマザーニーの名前を不朽のものとし、他方、その本文はアラビア語散文の最高規範として機能するようになった。そして、ハリリー作品を指標とすることで、それまで曖昧であったリサーラ、ヒカーヤ、マーカーマートの意味内容が鮮明に区別されるようになり、前二者と後者が明白に類別されることでマーカーマート・ジャンルが確立されるに到った。そして、以後、ハリリー作品に倣って、以下のような特徴を持つ作品が「マーカーマート」と見なされるようになった。①フィクショナルなエピソードを連ねた物語集という形式、とくに50話に纏め上げたもの、②語り手がその目撃譚を語る形式、③雄弁で博識の主人公像、そして、④全編にわたって数々の技法を駆使した流麗な詞章³⁷。

マーカーマートという新ジャンル確立に寄与したハリリーの影響力は現代にまで及んでいるが、ハマザーニーは名のみが称揚されるのみで、そのテキストはハリリーの栄光の下に埋もれてしまい、そこに含まれていた豊かな物語性が発展する道は閉ざされてしまった³⁸。このような状況からハマザーニー作品を救い出し、その価値を改めて評価するようになるには7世紀もの年月を必要とした。近代におけるマーカーマート・ジャンルの変容、それは取りも直さずハマザーニー作品の再評価につながるのだが、を考察する前に、ハマザーニー作品の出現状況を考えてみよう。彼がどのような文学環境下に置かれ、その中で相互に関係するテキストをいかに引用し、「引用の織物」を編み上げたのかを検証する。

4. 引用の織物

「間テキスト性」の最も基本的な概念は「全ての作品は引用の織物である」とする短いフレーズに要約できよう。つまり文学テキストは孤立して存在するのではなく、他の文学テキストとの間に関連があるとする思考法に立つ。文学テキストを「引用の織物」とみる立場である。しかもテキスト中の引用は、作者の意思とは無関係な無自覚的な引用をも含むとされ、さらに、アンチ・クロノロジカルな時代を逆転させた引用をも視野に入れている。テキストとテキストの相互の関連、従来の一方的な単一の影響関係とは明確な差異を呈している³⁹。このような視点はマーカーマート生成研究においても有効であろうと思われる。ある作品を、作者が複数のテキストから意識的、あるいは無意識的に行った「引用の織物」と見なすことで、その作品の隠されていた構造が明らかにされよう。この作業は起源となるべき、影響を与えたとされるある特定のテキストを探し求める源泉研究、比較研究とは明確に一線を画するものである。

この立場はJ・カラーの「間テキスト性とは、ある作品がそれに先立つ複数の特定なテキストと取り結ぶ関係を表す呼称というよりも、作品はある言説空間に参画しているということ」だとする主張と立場を同じくするものである⁴⁰。つまり、我々は、総体としての文学的伝統を問題にするのである。マーカーマートの生成過程を探る場合においても、影響を与えたとする特定のテキストを求める作業ではなく、どのような言説空間から生み出されたのかを検出するのである。これは2で考察したように、マーカーマート・ジャンル成立期の研究と同種の作業である。その作業を通して、ハマザーニーと同時代に、彼の作品と酷似した4作の存在が明らかになったが、ハマザーニー作品を含めたこれら5作品が、相互に無関係に成立した

事実は、あるアラビア語言説空間が存在した証左であろう。このような物語論を援用して、マカーマート・ジャンル成立に先立つ文化状況、具体的にはハマザーニー作品成立以前のアラビア語散文文学の状況、を考察してみよう。

前記4作に共通する文体面での特徴は、いわゆる押韻散文とパラレリズムにあったが、彼らと同時代、あるいはそれ以前に、アラビア語散文においてどのような文体が用いられていたのかを検証してみよう⁴¹。まずハマザーニー自身がどのような文体で著作を行っていたのかを考察する。「マカーマート」以外のハマザーニー作品である。作者は往々にして自身の作品の中からも引用を行う、という事実の指摘は、「間テキスト性」の一つの成果である⁴²。実際にハマザーニーは『マカーマート』中に、自作のリサーラからしばしば引用をおこなっている。また、彼はリサーラ（書簡・テーマ論文）の名手として名高く、文学史においては『マカーマート』の作者としてよりは、むしろリサーラの書き手として評価され、その作品は後世の手本として各種の選集に収録されている⁴³。その意味において、「マカーマート」と「リサーラ」は、発想、用語、修辞の各面において共通しており、文体上、同一の平面に属すると評価できるであろう。以下、原文に即してこの事実を検証してみよう⁴⁴。

ghadabu al-‘āshiqi aqṣaru ‘umran min an yantaḡira ‘udhran wa-in kāna fī al-zāhiri mahābata sayfin annahu fī al-bāṭini saḡābatu sayfin wa-qad rābanī i-rāḡuhu ṣafḡan a-fajid-dan qaṣada am mazḡan, wa-law iltabasa al-qalbānu ḡaḡqa iltibāsīhimā mā wajada al-shaytānu masāḡhan baynahumā wa-lā wa-al-lāhi lā aruffuka wuddan tajidu minhu bud-dan.

とかく愛し合っている者の癡癡球はすぐに破裂して、言い訳なども聞かばこそ。よしや、見かけは刀のごとく恐ろしくとも、内実は夏の日の雲のごとくに、たちどころに雲散霧消する。つれない仕打ちに心も萎え、嘘か真かと千々に乱れる我が想い。互いの心が真実の絆で結び合わさっているのなら、たといシャイターン（悪魔）も割って入るは叶わぬ業。神懸けて、心尽くして愛を捧げ、逃げ道など空いてはおらぬ。

この短い引用文には様々な修辞上の技法が駆使されている。冒頭で4語に渡ってr音で押韻し、リズムカルな文章を構成するとともに、‘umran（年）と‘udhran（言い訳）の2語でジナスを形成し、その効果を増幅させている。次いで2～4行目の重層的に構成された対偶表現（パラレリズム）で作者の意図を論理的に伝えることに成功している。先ずzāhir（外面）とbāṭin（内部）の2語で明示的な対立を表現し、さらに押韻すると共にほぼ同形でジナスを成しているsayf（剣）とṣayf（夏）の2語で、その対立をイメージ化すると同時に、文章全体を簡潔にまとめ、引き締める効果を上げている。総じてこの短い引用文は、バディーウ（新奇体）と呼ばれる詩作の技法を援用し、多様なテクニクを用い、全体として流麗な文章に仕上がっている。

次に、この『リサーラ』中の1文と、『マカーマート』の1文を比べてみよう。例えば第4話「シジスターンのマカーマ」はこのような文で始まる⁴⁵。

fa-ḡta‘adtu ṡiyyatahu wa-mtaḡaytu maṡiyy-atahu wa-stakhartu al-lāha fī l-‘azmi ja‘altuhu amāmī wa-l-ḡazmi ja‘altuhu imāmī ḡattā hadānī ilayḡa fa-wāfaytu durūbahā wa-qad

wāfati sh-shamsu ghurūbahā.

そこでわしはその意図に拍車をかけ（決心を実行に移し）、駱駝に跨った。そして眼前においた我が決心と、旅の先導者にと人を雇ったその決意に、神の御加護を祈った。その者は正しくわしを導き、町の入り口にまでやっと辿り着いたが、もうその時には陽がすっかり沈んでしまっていた。

冒頭、同形の2語がペアで押韻するばかりか対偶表現をも形成している。つまり、iqta‘adaと imtaṭayという同じ派生形第8形の動詞を用いて形を合わせ、さらにそれらの目的語にジナスで同形のṭiyyaと maṭiyyaという語を配置して重層的なパラリズムを作り上げている。また al-‘azmi ja‘altuhu amāmī と al-ḥazmi ja‘altuhu imāmī においても同様の技法が用いられており、3語がペアであるだけに、一層複雑で高度なテクニクが駆使されている。後続の部分においても、durūbuhā と ghurūbuhā のジナスを形成している同韻・同形の2語の前に、さらにジナスをなしている wāfaytu と wāfati の語において、この個所も重層的なパラリズムを構成している。

このように、ハマザーニーの「リサーラ」と『マカーマート』の文体は、単に押韻しているのみならず、内的韻によって豊かなリズム感を増幅させ、また修辞面では詩から転用したバディーウ体をも用いた華麗な文体である。両作品に共通するこのような様々な技巧を凝らした文体は、特にリサーラと称される著作で用いられ、ハマザーニーがその名手として名高かったことは先述のとおりである。

アラビア語の散文表現はイスラム勃興後急速に変化した。その変化の担い手は、コーラン解釈の必要性から派生したイスラム諸学に従事する学者

(アーリム)、ウマイヤ、アッパース両朝が起用した書記官僚（カーティブ）、さらに、アディーブと総称された宮廷に伺候した文人や世俗の文化人、であった。そして、カーティブが専門職であったのに対して、マカーマートの語り手、イーサーが示すごとく、学者や文化人は時に他の職業に従事しながら、自由に己の興味に従って著作に勤しんでいた。

彼らに共通する著作にリサーラと呼ばれるジャンルがあり、その出現は750年頃と推定されている。そして、前述したように、リサーラは己の博識と文章力を誇示する絶好の形式であり、媒体となっていたので、書記官僚を筆頭に文化人達が競って書きあげていた⁴⁶。ハマザーニーはこのような文化的伝統を引き継いでいたのである。事実、先に見たように、彼の物した『マカーマート』とリサーラは文体面では区別できないほど類似していた。また、後代において、彼のリサーラ中から作品を抜き出して『マカーマート』に挿入され、それがそのまま現在にまで伝わっている経緯もある⁴⁷。このように、ハマザーニーは彼に先立つ言語環境に深く影響を受けていたのであり、華麗な文体を駆使する『マカーマート』は、決して彼の独創性が生み出したものではない。

さて、2で検討したハマザーニーと同時代の4作品に共通する第2の特徴は「作為性fictionality」であった。ハリリーが言明していたごとく、アラブ・イスラム世界に底流していた架空の物語に対する忌避感は根強かったが、ハマザーニーらは架空の伝承経路（イスナード）を活用することでその隘路を抜け出し、アラブ文学に新生面を切り開くことができた。しかし、題材的には当時流布していたアダブもの、わけても「逸話文学」に依存しており、この事実はまた、文学が時代や環境の制約から逃れられないことを示している。彼らはジャーヒズ（868年没）やタヌーヒー（994年没）

らが集成した逸話中から自在に引用し、元の逸話に架空の伝承経路を付し、新しい文体を着せて換骨奪胎を図ったのである。その意味において、彼らの作品はまさに間テキスト性が教える「引用の織物」そのものであると見なしうる⁴⁸。

「逸話文学」は宗教資料（ハディース）や歴史資料（ハバル）を収集・分類することから生み出されたもので、この作業はおおよそ9世紀には終了していた。いわば、アラブ・イスラム世界では9世紀を以って歴史事実収集の「門」は閉ざされ、その巨大な知の総体は法学、文法学、宗教学、歴史学、等々の資料（コーパス）であると同時に、文学における共通の題材となっていた。それゆえ文学者としての能力は架空の物語を紡ぎ出す想像力ではなく、与えられた歴史資料を独自の審美眼や視点に基づいて選別する能力、換言すれば、引用能力、によって評価された。10世紀以降、アラブ文学において陸続と「選集」が出現したのはこのようなアラブ・イスラム世界独特の事情による⁴⁹。やがてこの流れの中から、ジャーヒズやタヌーヒーを筆頭に、娯楽を志向する作品を物する文人たちが現れるに到ったが、表面上はあくまでも教化目的を装っていた。しかし、ハマザーニーを嚆矢に、イブン・ブトラーン、イブン・ナーキヤー、マアッリー、イブン・シュハイドラは自己の著作が娯楽目的であるという旗幟を鮮明にしたのである。このように題材的にもマカーマート生成には、それに先立つ伝統を総体的に引き継ぎ、前時代に深い影響を受けていたのである。

また、ハマザーニーが多数の題材を得たと推測されるタヌーヒーの作品は、その「難事の後安息」というタイトルが示すごとくに、各話は物語の展開に緩急をつけ、主人公が窮地に陥り、あわやのところ九死に一生を得るといった叙述構造を持っている。この臨場感を盛り上げ、読者に緊張感を強いる叙述スタイルをも、ハマザーニーらは

自作に援用したのである。ハマザーニー作品においては「ビシュリーヤ」、「獅子」のマカーマがその典型として挙げられるであろう⁵⁰。

さらにアラブ文学に深く根を下ろし、トポスとなっていた「冗談と真面目さ *hazl wa-jidd*」という叙述法や、2物を対比的に論じてその優劣を判定したり (*maḥāsin wa-masāwi*)、同一物が内包する正反対の性質を明らかにしたりする、というアダブ作品独特の叙述法もハマザーニー作品に取り入れられている。この叙述法の淵源は古く、ジャーヒリーヤ期にまで遡ると推測されているが、特に詩においては一つのジャンルを形成しており、「ムナーザラ *munāzara*」「ムファーハラ *mufākhara*」「ムナーファラ *munāfara*」等の呼称が付けられていた。散文においてはジャーヒズの『動物誌』を嚆矢とし、バイハキーやサアーリビーが後を継いだ⁵¹。ハマザーニーの『マカーマート』においても随所にこれら二つの叙述法が使われている、第39話の偽ハッジや第33話のハッジ帰りの入浴事件が「冗談と真面目さ」の典型として指摘できるし、職業の損得や詩人の優劣を問うマカーマは後者の例として挙げられる。そして何よりも、見かけと内実の不一致という「マカーマート」の中心構造を支える思考法、叙述法なのである⁵²。

このようにして、文体（サジュウ、パラレリズム）、形式（リサーラ）、題材（アダブ物、逸話文学）、叙述法（難事の後救済、冗談と真面目さ）、人物設定（性格描写）（言葉の紡ぎ手）、の各面において、ハマザーニーは先行する諸作品を自作に取り込み、それらを自在に換骨奪胎させた。約言すれば、彼は様々なジャンルを一つにまとめるジャンル横断的な作家であった。そして『マカーマート』は、文体、形式、題材、叙述法、人物設定において、先行諸作品を一つに収斂させた「引用の織物」であり、ジャンル総合的な作品であったと言えるであろう。しかし、ハマザーニーを時代

を超越した天才と見なすことは慎むべきであろう。2で考察した作家たちもまた同様の作業を行っていたのであるから。文学作品は孤立したものではない。ある共通の言説空間に参画していることを見落としてはならない。斬新さを評価されているハマザーニーの『マカーマート』も、そのような作品の一つである。間テキスト性を軸にハマザーニーらの著作を分析すると、『マカーマート』がアラブ文学の豊かな伝統が必然的に生み出した作品であり、他の文化圏に例を見ない独自のジャンルを形成している理由が説明されうるであろう⁵³。

5. 影響の不安

ハリリーが『マカーマート』を著してからアラブ近代文学が成立する18世紀末までに、マカーマートと題された作品は200を越え、その著者名は「アラブ名士録」を形成する程に著名人を網羅しており、この新しいジャンルの影響力の大きさを示している⁵⁴。名のある文人は挙って『マカーマート』に注釈を施すか、あるいは自らその実作に励んだ。ハリリー以後、最初に「マカーマート」と冠した作品を発表したのはザマフシャリー(1143年没)であったが、イスナードが無い形式、説教を主題とする内容からして、早くもハリリーにより確立されたマカーマート形式からの逸脱傾向を示している。ザマフシャリーの『マカーマート』は、その題名、50のマカーマの集成、韻文と散文の混交という文体においてハリリーの影響を受けている⁵⁵。逆に言えば、ハリリーが開陳した華麗な文体こそが「マカーマート」の本質と解釈され、内容面で実に多様なマカーマート作品が生み出されることになったのである。

この傾向は近代にまで引き継がれており、一例を挙げれば、バグダードのスイディー家のサロンや、大部なアラビア語辞典『タージュ・アルアールス(花嫁の宝冠)』の編者、アルザービディ

ー(1791年没)のサロンでの話題はハリリーを巡って展開され、『マカーマート』の注釈やその模倣作の試みが行われていた⁵⁶。かくしてハリリー作品はアラブ文学における巨大な水脈として機能し、他方、作品の難解さと高踏性からして、教養層と無教養層を分ける指標の役割を果たし、アラブ文化のハイブラウな性格形成に多大の影響を及ぼすことになった。

マカーマートは閉じられたテキストであり、広く万人が享受できる作品ではない。その受容者は識字能力と読解力を持った者、つまり、アディーブと呼ばれる人たちに限定される。アディーブは社会各層に広く存在していたが、中心は学者、書記官僚、宮廷を囲繞する文化人であった。上記のサロンに集う人々は、いわばこのアディーブの末裔であり、同様の感受性や嗜好を受け継いでいると考えられる。彼らは己の知的能力を試し、言語能力を発揮するためにハリリーに挑んだ。そのテキストにはアクロバチックな言葉遊びや謎々が仕掛けられており、かつ、主人公は博識と雄弁を備えた万能人間である。ハリリーの『マカーマート』はアディーブの理想像が描かれているのである⁵⁷。

ハリリーの対句と押韻を駆使した華麗な文章を基準にハマザーニー作品を評価すれば、その優劣は明白である。ハリリー作品を介してハマザーニー作品に接する者は、その文体面での落差に眼を眩まされて、ハマザーニー作品が有する豊かな物語性や鋭い批判精神を見落としてしまった。間テキスト性が示す誤読効果が発揮されたのである。

またハリリーの『マカーマート』が典型モデルとされたために、対句を鏤めた押韻散文という文体面のみを模倣して「マカーマート」と冠する作品が出現したことも、さらなる誤読の効果である⁵⁸。「マカーマート」の名の下に多種、多様な作

品が叢生し、やがてジャンルとしてのマカーマートの境界が曖昧なものとなった。歴史は逆転したのである。このような流れの中で一旦埋もれていたハマザーニー作品が再評価されるようになった。

19世紀の文明復興期（ナフダ）においても、ナーシフ・アルヤージジーはハリリー作品をモデルとして『双海の合流点Majma' al-Baḥrayn』を著した（1856年）。この作品はあくまでも教化を目的とし、物語性を度外視したものであり、ハリリー垂流の綺語を鏤めた文体はアラブ文学に新生面を開くものではなかった⁵⁹。

このような状況からハマザーニーを救い出し、その名誉を回復させたのがシドヤーク（1887年没）とムワイリヒー（1930年没）であった。ここにもまた反クロノロジカルな影響という間テキスト性的一面を見ることができる。これら兩名の作品の読者は、もはや単調で美辞零句を連ねたハリリー作品やその垂流のヤージジー作品に価値を見出すことはできず、逆に、ジャンル横断的で、各種作品をコラージュしたハマザーニー作品に新しさを感じ取り、見落とされていた物語性を見つけ出した。シドヤークは語り手にアル・ハーリス・ブン・ヒサームという、ハマザーニー作品の語り手（イーサー・ブヌ・ヒシャーム）とハリリー作品の語り手（ハーリス・ブヌ・ハッマーム）の名を合成した名前をつけて、パロディー性を露にした。他方、ムワイリヒーは語り手の名をハマザーニー作品と同じイーサー・ブヌ・ヒシャームとすることでハマザーニーへのオマージュとした。ハマザーニーがパロディー仕立てで当時の世相を非難したのと同様に、ムワイリヒーも頑迷な支配者階級、特に官僚や宗教関係者の態度を皮肉り、エジプト社会の実態を赤裸々に描いた。このようにムワイリヒーの作品を通してハマザーニーのリハビリテーションがなされたのである⁶⁰。しかしマ

カーマート・ジャンルの命脈はムワイリヒーに止まるのではなく、その後も遅れてきた者の「影響の不安」を感じつつも多くの作家が筆を染めている⁶¹。

[参 照 文 献]

- ‘Abbās, I., *Studies in Literature, Criticism and History*, 3 vols., Beirut, Dār al-Gharb al-Islāmī, 2000.
- ‘Abd al-Ḥamīd, M.Y.D., *Sharḥ Maqāmāt Badī‘ al-Zamān al-Hamadhānī*, Bayrūt, Dār al-Kutub al-‘Ilmiyya, n.d.
- Abu-Haidar, J., “Maqāmāt Literature and the Picaresque Novel,” *JAL*, 5 (1974) .
- ‘Ā’ishah, ‘A.R., “Abū ‘l-‘Alā’ al-Ma‘arrī,” in ‘*Abbasid belles-lettres* (CHAL), eds., J.Ashtiany, T.M.Johnstone et al., Cambridge, Cambridge UP., 1990.
- Allen, G., *Intertextuality*, London, Routledge, 2000. (森田訳『間テキスト性—文学・文化研究の新展開』研究社、2002年)。
- Allen, R., “Hadith ‘Isa Ibn Hisham by Muhammad al-Muwailihī. A Reconsideration,” *JAL*, 1 (1970) .
- , “The Beginnings of the Arabic Novel,” in *Modern Arabic Literature* (CHAL), ed. M.M.Badawī, Cambridge, Cambridge UP., 1992.
- , “Ḥadīth ‘Isā ibn Hishām by al-Muwayliḥī: Thirty Years Later,” in *Arab and Islamic Studies in Honor of Marsden Jones*, eds., Th.Abdullah, B.O’Kane et al., Cairo, The American University in Cairo Press, 1997.
- , *The Arabic Literary Heritage. The Development of its Genres and Criticism*, Cambridge, Cambridge U.P., 1998.
- , “Literary History and Generic Change: The Example of the Maqāma,” in *Studies in Honor of Clifford Edmund Bosworth, V.1. Hunter of the East: Arabic and Semitic Studies*, ed., I.R.Netton, Leiden, Brill, 1998.
- Badawī, M.M., “Medieval Arabic Drama: Ibn Dāniyāl,” *JAL*, 13 (1982).
- , *Early Arabic Drama*, Cambridge, Cambridge UP., 1988.
- (ed.), *Modern Arabic Literature* (CHAL), Cambridge, Cambridge UP., 1992.

- (al-)Bagdadī, N., “The Cultural Function of Fiction: From the Bible to Libertine Literature. Historical Criticism and Social Critique in Aḥmad Fāris al-Šidyāq,” *Arabica*, 46(1999).
- Beaumont, D., “A Mighty and Never Ending Affair: Comic Anecdote and Story in Medieval Arabic Literature,” *JAL*, 24(1993).
- , “The Trickster and Rhetoric in the *Maqāmāt*,” *Edebiyāt*, n.s., 5(1994).
- Beeston, A.F.L., “The Genesis of the *Maqāmāt* Genre,” *JAL*, 2(1971).
- , “Parallelism in Arabic Prose,” *JAL*, 5(1974).
- , *Samples of Arabic Prose in its Historical Development*, Oxford, Oxford U.P., 1977.
- , “The Role of Parallelism in Arabic Prose,” in *Arabic Literature to the End of the Umayyad Period (CHAL)*, eds., A.F.L. Beeston, T.M. Johnstone et al., Cambridge, Cambridge UP, 1983.
- , “Al-Hamadhānī, al-Ḥarīrī and the *maqāmāt* genre,” in ‘*Abbasid Belles-Lettres (CHAL)*, eds., J. Ashtiany, T.M. Johnstone et al., Cambridge, Cambridge UP, 1990.
- Beeston, A.F.L., Johnstone, T.M et al. (eds.), *Arabic Literature to the End of the Umayyad Period (CHAL)*, Cambridge, Cambridge UP, 1983.
- (al-) Biqā’ī, Y., *Sharḥ Maqāmāt Badī’ al-Zamān al-Hamadhānī*, Bayrūt, al-Sharika al-Ālamiyya li-l-Kitāb Shml, 1990.
- Bloom, H., *The Anxiety of Influence: A Theory of Poetry*, Oxford, Oxford UP, 1997. (小谷野・アルヴィ宮本訳『影響の不安—詩の理論のために』新曜社、2004年)。
- Bodman, Wh.S., “Transgression and the Strife for Knowledge and Fulfillment; Stalking Iblīs: in search of an Islamic theodicy, in *Myths, Historical Archetypes and Symbolic Figures in Arabic Literature*, eds., A. Neuwirth, B. Embaló et al., Beirut, Franz Steiner, 1999.
- Bonebakker, S.A., “Early Arabic Literature and the Term Adab,” *Jerusalem Studies in Arabic and Islam*, 5 (1984).
- , “Adab and the Concept of *belles-lettres*,” in ‘*Abbasid Belles-Lettres (CHAL)*, eds., A.F.L. Beeston et al., Cambridge, Cambridge UP, 1990.
- , “Nihil obstat in Storytelling?” in *The Thousand and One Nights in Arabic Literature and Society*, eds., R.G. Hovannisian & F. Malti-Douglas et al., Cambridge, Cambridge UP, 1997.
- Bosworth, C.E., “A *Maqāma* on Secretaryship: Al-Qalqashandī’s *Al-Kawākib al-Durriyya fi’l-Manāqib al-Badriyya*,” *BSOS*, 27(1964).
- , “Administrative Literature,” in *Religion, Learning and Science in the ‘Abbasid Period (CHAL)*, eds. M.J.L. Young, J.D. Latham and R.B. Serjeant, Cambridge, Cambridge UP, 1990.
- Brugman, J., *An Introduction to the History of Modern Arabic Literature in Egypt*, Leiden, Brill, 1984.
- Bürgel, J.Ch., “The Poet and his Demon,” in *Conscious Voices ; Concepts of Writing in the Middle East (Proceedings of the Berne Symposium, July 1997)*, eds., St. Guth, P. Furrer, and J.Ch. Bürgel, Beirut, Franz Steiner, 1999.
- , “Language on Trial, Religion at Stake? : Trial Scenes in Some Classical Arabic Texts and the Hermeneutic Problems Involved,” in *Myths, Historical Archetypes and Symbolic Figures in Arabic Literature*, eds., A. Neuwirth, B. Embaló et al., Beirut, Franz Steiner, 1999.
- Cachia, P.J.E., “The Dramatic Monologues of Al-Ma’arrī,” *JAL*, I (1970).
- , *Arabic Literature: An Overview*, New York, Routledge Curzon, 2002.
- Cheikh-Moussa, A., “Réalité et fiction dans *Le Livre des avars d’al-Ġāhiz*,” in *ST*.
- Cheikh-Moussa, A., Toelle, H. et Zakharia, K., “Pour Une Re-Lecture des Textes Littéraire Arabes : Éléments de Réflexion,” *Arabica*, 46(1999).
- Chenery, Th. (trans.), *The Assemblies of Al Ḥarīrī with an Introduction and Notes Historical and Grammatical*, Vol. I, London, Williams & Norgate, 1867.

- Steingass, F. (trans.), Vol. 2, London, Royal Asiatic Society, 1898.
- Culler, J., *Literary Theory : A Very Short Introduction*, London, Oxford UP., 1997. (荒木・富山訳『文学理論』岩波書店、2003年)。
- Currie, M., *Postmodern Narrative Theory*, New York, St. Martin's Press, 1998.
- Ḍayf, Sh., *al-Fann wa-Madhāhibuhu fī al-Nathr al-'Arabī*, al-Qāhira, Dār al-Ma'ārif, 1946.
- , *Al-Maqāma*, al-Qāhira, Dār al-Ma'ārif, 1954.
- Drory R., *Models and Contacts: Arabic Literature and its Impact on Medieval Jewish Culture*, Leiden, Brill, 2000.
- Ebied, R.Y. & Young, M.J.L., "Some Verses in Praise of al-Ḥarīrī," *JSS*, 19 (1974).
- Elinson, A.E., "Tears shed over The Poetic Past: The Prosification of *Rithā' Al-Mudun* in Al-Saraqūṣī's *Maqāma Qayrawāniyya*," *JAL*, 36 (2005).
- Frolov, D., *Classical Arabic Verse ; History and Theory of 'Arūd*, Leiden, Brill, 2000.
- Gelder, G.J., van, "The Conceit of Pen and Sword: On an Arabic Literary Debate," *JSS*, 32 (1987).
- , "Arabic Debates of Jest and Earnest," in *Dispute Poems and Dialogues*, eds. G.J. Reinink and H.L.J. Vanstiphout, 1991.
- , "Mixtures of Jest and Earnest in Classical Arabic Literature," Part 1. *JAL*, 23 (1992), Part 2. *JAL*, 23 (1992).
- , "Rhyme in *Maqāmāt*; Or too many exceptions do not prove a rule," *JSS*, 44 (1999).
- , *Of Dishes and Discourse: Classical Arabic Literary Representations of Food*, Richmond, Curzon, 2000.
- , "Beautifying the ugly and uglifying the beautiful: The Paradox in classical Arabic Literature," *JSS*, 48 (2003).
- Geries, I., *Un Genre littéraire arabe: Al-mahāsīn wa-l-masāwi'*, Paris, Larose, 1977.
- , "L'adab et le genre narratif fictif, in *ST*.
- Ghazi, M.F., "La Litterature d'Imagination en Arabe du IIe/VIIIe au Ve/XIe Siècles, *Arabica*, 4 (1957).
- Gibb, H.A.R., *Arabic Literature: An Introduction*, Oxford, Oxford UP., 1963. (井筒訳『アラビア人文学』講談社、1990年)。
- Goodman, L.E., "Hamadhānī, *Schadenfreude*, and Salvation through Sin," *JAL*, 19 (1988).
- Hachmeier, K.U., "Die Entwicklung der Epistolographie vom frühen Islam bis zum 4./10. Jahrhundert," *JAL*, 33 (2002).
- Hafez, S., *The Genesis of Arabic Narrative Discourse: A Study in the Sociology of Modern Arabic Literature*, London, Saqi Books, 1993.
- Hamadhānī, Abū al-Faḍl Badī' al-Zamān, *Maqāmāt*, ed. Muḥammad 'Abduhu, Bayrūt, Dār al-Mashriq, 1973.
- Hämeen-Anttila, J., *Maqama: A History of a Genre*, Wiesbaden, Harrassowitz, 2002.
- Hamilton, M.M., "'Words sweeter than Honey' : The Go-between in Al-Saraqūṣī's "*Maqāma* 9," *JAL*, 34 (2003).
- Hamori, A., "Tinkering with the text: Two variously related stories in the *Faraj Ba'd al-Shidda*," in *ST*.
- (al-) Ḥarīrī, al-Qāsim b. 'Alī Abū Muḥammad, *Maqāmāt*, ed. S. de Sacy, *Les Séances de Ḥarīrī publiées en arabe avec un commentaire choisi*. Deuxième édition par J. Reinaud et J. Derenbourg, Paris, 1847~1853. [repr. Amsterdam, Oriental Press, 1968].
- , *Maqāmāt al-Ḥarīrī*, ed. 'Ī. Sābā, Bayrūt, Dār Ṣādir, 1980.
- Heinrichs, W., "Rose versus Narcissus. Observations on an Arabic Literary Debate," in *Dispute Poems and Dialogues in the Ancient and Mediaeval Near East: Forms and Types of Literary Debates in Semitic and Related Literatures*, eds. G.J. Reinink and H.L.J. Vanstiphout, Leuven, Uitgeverij Peeters, 1991.
- Holes, C., "The Structure and Function of Parallelism and Repetition in spoken Arabic ; a sociolinguistic study," *JSS*, 40 (1995).
- (al-) Ḥuṣrī, *Zahr al-Ādāb wa-Thamar al-Albāb*, 4 parts in 2 vols, ed. Zakī Mubārak, Bayrūt, Dār al-Jīl, 1925.
- Ibn Buṭlān, *Da'wa al-Aṭibbā'*, *The Physicians' Dinner*

- Party, ed., F. Klein-Franke, Wiesbaden, Otto Harrassowitz, 1985.
- Ibn Durayd, *Kitāb Waṣf al-Maṭar wa-al-Saḥāba*, Bayrūt, Dār Ṣādir, s.a.
- Ibn Nāqiyā, *Maqāmāt al-Hanafī wa-Ibn Nāqiyā wa-Ghayrihimā*, ed., O. Rescher, in *Res.*
- Ibn Shuhayd, *Risāla al-Tawābi' wa-al-zawābi'*, ed. & anot. B. al-Bustāni, Bayrūt, Dār Ṣādir, 1967.
- Iványi, T., "Dynamic vs. Static - A Kind of Parallelism in al-Hamadhānī's *Maqāmāt*," in *Proceedings of the Colloquium on Arabic Lexicology and Lexicography*, Budapest, (*The Arabist : Budapest Studies in Arabic*), 6-7(1993).
- , "On Rhyming Endings and Symmetric Phrases in al-Hamadhānī's *Maqāmāt*," in *Tradition and Modernity in Arabic Language and Literature*, ed., J.R. Smart, Richmond, Curzon, 1996.
- Jones, A., "The Prose Literature of Pre-Islamic Arabia," in *Tradition and Modernity in Arabic Language and Literature*, ed., J.R. Smart, Richmond, Curzon, 1996.
- Jum'a, I., *Abū Zayd al-Sarījī: al-Adīb al-muḥtāl bi-l-thawbayni wa-l-'ukāza wa-l-jirāb*, al-Qāhira, Maktaba Nahḍa, 1949.
- Kilito, A.F., "Le Genre <Séances>: une introduction," *SI*, 43 (1976).
- , "Contribution à l'étude de l'écriture "littéraire" classique. L'exemple de *Ḥarīrī*," *Arabica*, 25 (1978).
- , *Les Séances: Récits et codes culturels chez Hamadhānī et Ḥarīrī*, Paris, Sindbad, 1983.
- Kilpatrick, H., "Context and the Enhancement of the Meaning of *AḤBĀR* in the *KITĀB AL-AĠĀNĪ*," *Arabica*, 38 (1991).
- , "Modernity in a Classical Arabic *Adab* Work, The *Kitāb al-aghānī*," in *Tradition and Modernity in Arabic Language and Literature*, ed., J.R. Smart, Richmond, Curzon, 1996.
- , "The "genuine" Ash'ab. The relativity of fact and fiction in early *adab* texts," in *ST*.
- Kristeva, J., *Semeiotikè : recherches pour une sémanalyse*, Paris, Seuil, 1969. (原田邦夫訳『記号の解体学[セメイオチケ]1』、せりか書房、1983年)。
- Latham, J.D., "The Beginnings of Arabic Prose Literature," in *Arabic Literature to the End of the Umayyad Period (CHAL)*, eds. A.F.L. Beeston et al., Cambridge, Cambridge UP., 1983.
- Leder, S., (ed.), *Story-telling in the Framework of non-fictional Arabic Literature*, Wiesbaden, Harrassowitz, 1998.
- , "Conventions of fictional Narration in learned Literature," in *ST*.
- Leder, S. and Kilpatrick, H., "Classical Arabic Prose Literature: A Researchers' Sketch Map," *JAL.*, 23 (1992).
- Leemhuis, F., "A Koranic Contest Poem in *Sūrat aṣ-Ṣaffāt*?" in *Dispute Poems and Dialogues*, eds. G.J. Reinink and H.L.J. Vanstiphout, Leuven, Uitgeverij Peeters, 1991.
- Lyons, M.C., *Identification and Identity in Classical Arabic Poetry*, London, E.J.W. Gibb Memorial Trust, 1999.
- (al-)Ma'arrī, *Risālat al-Ghufrān*, ed. 'Ā'isha 'Abd al-Raḥmān, al-Qāhira, Dār al-Ma'ārif, s.a.
- , *Risāla al-Ṣāhil wa-l-Shāhij*, ed. 'Ā'isha 'Abd al-Raḥmān, al-Qāhira, Dār al-Ma'ārif, 1975.
- Malti-Douglas, F., "*Maqāmāt* and *adab*:"al-Maqāma al-Maḍīriyya" of al-Hamadhānī," *JAOS*, 105 (1985).
- , *Structures of Avarice: The Bukhalā' in Medieval Arabic Literature*, Leiden, E.J. Brill (1985).
- Mattock, J.N., "The Early History of the *Maqāma*," *JAL.*, 15 (1984).
- , "The Arabic Tradition: Origin and Developments," in *Dispute Poems and Dialogues*, eds., G.J. Reinink and H.L.J. Vanstiphout, Leuven, Uitgeverij Peeters, 1991.
- Meisami, J.S. & Starkey, P. (eds.), *Encyclopedia of Arabic Literature*, 2 vols., London, Routledge, 1998.
- Monroe, J.M., *Risālat at-Tawābi' wa z-zawābi' ; The Treatise of Familiar Spirits and Demons by Abū 'Āmir ibn Shuhaid al-Ashja'i, al-Andalusī*, University of California Press, 1971.
- , *The Art of Badī' az-Zamān al-Hamadhānī as Picaresque Narrative*, Beirut, American University of Beirut, 1983.
- Monroe, J.M. and Pettigrew, M.F., "The Decline of Courtly

- Patronage and the Appearance of new Genres in Arabic Literature: The Case of The *Zajal*, The *Maqāma*, and The *Shadow Play*,” *JAL*, 34(2003).
- Monteil, V., *L'Épître du pardon par Abū-l-'Alā' al-Ma'arrī: traduction, introduction et notes explicatives par V M Monteil*, Paris, Gallimard, 1984.
- Montgomery, J.E., *The Vagaries of the Qaṣīdah: The Tradition and Practice of Early Arabic Poetry*, London, E.J.W.Gibb Memorial Trust, 1997.
- Moreh, Sh., “The Shadow Play (Khayāl al-Ẓill) in the Light of Arabic Literature,” *JAL*, 18(1987).
- , *Live Theatre and Dramatic Literature in the Medieval Arab World*, Edinburgh, Edinburgh UP., 1992.
- Mubārak, Z., *Al-Nathr al-fannī fī al-qarn al-rābi'*, 2 vols., al-Qāhira, al-Maktaba al-Tijāriyya al-Kubrā, 1955.
- Mūsā, S., *Al-Adab al-Qiṣaṣī 'inda al-'Arab*, Bayrūt, Dār al-Kutub al-Lubnāniyya, 1983.
- Al-Muwaylihi, M., *Ḥadīth Isa bn Hishām aw fatra min al-zamān*, al-Qāhira, Sharika Masāhima miṣriyya, n.d.
- Neuwirth, A. & Embaló, B. et al. (eds.), *Myths, Historical Archetypes and Symbolic Figures in Arabic Literature ; towards a new hermeneutic approach, Proceedings of the International Symposium in Beirut*, June 25th - June 30th, 1996, Stuttgart, Steiner, 1999.
- Nicholson, R.A., *A Literary History of the Arabs*, Cambridge, Cambridge UP., 1907.
- Orr, M., *Intertextuality: Debates and Contexts*, Cambridge, Polity Press, 2003.
- Peled, M., “al-Sāq ‘alā al-Sāq- A Generic Definition,” *Arabica*, 32(1985).
- Pellat, Ch., “Dictons Rimés, ANWĀ', et Mansions lunaires chez Les Arabes,” *Arabica*, 2(1955).
- , “La Prose Arabe à Baḡdād,” *Arabica*, 9(1962).
- , “Al-Ṣāhib Ibn ‘Abbād,” in *Abbasid belles-lettres (CHAL)*, eds. J.Ashtiany et al., Cambridge, Cambridge UP., 1990.
- Prendergast, W.J. (trans.), *Maqāmāt of Badī' al-Zamān al-Hamadhānī*, (New Imp.), London, Curzon Press, 1973.
- Reinink, G.J. and Vanstiphout, H.L.J. (eds.), *Dispute Poems and Dialogues in the Ancient and Mediaeval Near East: Forms and Types of Literary Debates in Semitic and related Literatures*, Louvain, Uitgeverij Peeters, 1991.
- Rescher, O., *Gesammelte Werke*, Abteilung II, *Schriften zur Adab-Literatur*, Band I, *Beiträge zur Maqamen-Literatur*, Osnabrück, Biblio, 1980.
- Richards, D.S., “The *Maqāmāt* of al-Hamadhānī : General Remarks and a Consideration of the Manuscripts”, *JAL*, 22(1991).
- Rowson, E.K., “Religion and Politics in the Career of Badī' Al-Zamān Al-Hamadhānī,” *JAOS*, 107(1987).
- Sanni, A., “Again on *taḍmīn* in Arabic theoretical Discourse,” *BSOAS*, 45(1998).
- , *The Arabic Theory of Prosification and Versification on Ḥall and Naẓm in Arabic Theoretical Discourse*, Stuttgart, Franz Steiner, 1998.
- Schoeler, G., “*Iblīs* in the Poems of Abū Nuwās,” *ZDMG*, 151(2001).
- Schönig, H., *Das Sendschreiben des 'Abdalḥamid b. Yahyā (gest. 132/750) an den Kronprinzen 'Abdallāh b. Marwān II*, Wiesbaden, Franz Steiner, 1985.
- Sells, M.A., “Guises of the *Ghūl*: Dissembling Simile and Semantic Overflow in the Classical Arabic *Nasīb*,” in *Reorientations/Arabic and Persian Poetry*, ed. S.P.Stetkevych, Bloomington, Indiana UP., 1994.
- (al-) Shak'a, A.M., *Badī' al-Zamān al-Hamadhānī: Rā'id al-Qiṣṣa al-'Arabiyya wa-l-Maqāla al-Ṣuhufiyya*, Bayrūt, 'Ālam al-Kutub, 1983.
- (al-) Sharīshī, A.b.'A.M.Q., *Sharḥ Maqāmāt al-Ḥarīrī*, 5 vols., al-Qāhira, al-Mu'assasa al-'Arabiyya al-Ḥadītha, 1976.
- Smoor, P., “Enigmatic Allusion and Double Meaning in Ma'arrī's newly discovered *Letter of a Horse and a Mule*,” 2 parts, *JAL*, 12(1981), 13(1982).
- Souami, L., “Fictionnel et non-fictionnel dans l'oeuvre de Ġāhiz,” in *ST*.
- Sperl, S. & Schackle, Ch. (eds.), *Qasida Poetry in Islamic Asia and Africa*, 2 vols., Leiden, E.J. Brill, 1996.
- (al-) Suyūṭī, J. D., *Maqāmāt. (Maqāmāt al-Suyūṭī al-*

- Adabiyya wa-al-Ṭibbiyya*), ed. T. Aḥmad, Tunis, Dār Sujūn, 1988. *Maqāmāt al-Suyūfī al-Adabiyya wa-al-Ṭibbiyya*, ed. I.S. Muḥammad, al-Qāhira, Maktaba Ibn Sīnā, 1988.
- (al-) Tanūkhī, M., *al-Faraj ba'da al-Shidda*, 4 vols., Bayrūt, Dār Ṣādir, 1978.
- (el-) Tayib, A., "Pre-Islamic Poetry," in *Arabic Literature to the End of the Umayyad Period (CHAL)*, eds., A.F.L. Beeston, T.M. Johnston et al., Cambridge, Cambridge UP., 1983.
- (al-) Tha'ālibī, *Yaṭīmat al-Dahr*, 4 vols., Bayrūt, Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 1979.
- Todorov, Tz., *Introduction à la Littérature fantastique*, Paris, Seuil, 1970. (三好郁朗訳『幻想文学論序説』東京創元社、1999年)。
- Wild, St., review of *Maqāmāt ibn Nāqiyā* (ed. Ḥasan 'Abbās), *JAL*, 23(1992).
- , "Die Zehnte Maqame des Ibn Nāqiyā: Eine Burleske aus Baghdad," in *Festschrift Ewald Wagner zum 65. Geburtstag*, eds., W. Heinrichs and G. Schoeler, Beirut, Franz Steiner, 1994.
- (al-) Yāzījī, N., *Kitāb Majma' al-Baḥrayn*, Bayrūt, al-Ābā' al-yasū'ī, 1873.
- Zakharia, K., "al-Maqāma al-Bishriyya: Une épopée mystique," *Arabica*, 37(1990).
- , "Intemperance, Transgression et Relation a la Langue dans les *Maqāmāt* d'al-Ḥarīrī," *Arabica*, 41 (1994).
- , "Norme et Fiction dans la Gèneses des *Maqāmāt* d'al-Ḥarīrī," *BÉO*, 46(1994).
- (al-) Zamakhsharī, A.Q., *Maqāmāt. (Sharḥ Maqāmāt az-Zamakhsharī)*, ed. Y. Biqā'ī, Bayrūt, Dār al-Kitāb al-Lubnānī, n.d.
- (al-) Zu'bī, Z.R., *Das Verhältnis von Poesie und Prosa in der arabischen Literaturtheorie des Mittelalters*, Berlin, Klaus Schwarz, 1987.
- Zwettler, M., *The Oral Tradition of Classical Arabic Poetry: Its Character and Implications*, Columbus, Ohio State UP., 1978.
- 石井洋二郎『文学の思考～サント＝ブーヴからブルデューまで』東京大学出版会、2000年。
- 大浦康介編『文学をいかに語るかー方法論とトポス』新曜社、1996年。
- 岡崎桂二「『マカーマート』の言語遊戯—「マディーラーのマカーマ」に即して」、『関西アラブ・イスラム研究』、関西アラブ研究会編、1号(2001年)。
- ,「アダブの罫—『マカーマート』のエクリチュール」、『四天王寺国際仏教大学紀要』、34号(2002年)。
- ,「アラブ詩におけるレトリック—アブー・タンマームに即して」『関西アラブ・イスラム研究』、関西アラブ研究会編、2号(2002年)。
- 小高正直「盲目の詩人マアッリー〜バグダード留学・宥しの書」、深井晋司編『西アジア史研究』東京大学出版会、1974年。
- 杉田英明「天路歷程譚の系譜—イスラーム世界とダンテ」、蓮見・山内(編)『地中海終末論の誘惑』東京大学出版会、1996年。
- 丹治愛編『知の教科書—批評理論』講談社、2003年。
- 土田知則『問テクスト性の戦略』夏目書房、2000年。
- 土田・青柳悦子『文学理論のプラクティス—物語・アイデンティティ・越境』新曜社、2001年。
- 土田・神郡悦子・伊藤直哉『現代文学理論—テクスト・読み・世界』新曜社、1996年。

[文献略号]

BÉO	Bulletin d'Études Orientales
BSOAS	Bulletin of the School of Oriental and African Studies
CHAL	The Cambridge History of Arabic Literature
EAL	Encyclopedia of Arabic Literature
EI	The Encyclopaedia of Islam. New Edition
JAL	Journal of Arabic Literature
JAOS	Journal of the American Oriental Society
JSS	Journal of Semitic Studies
Res	Oskar Rescher, Gesammelte Werke
SI	Studia Islamica
ST	Story-telling in the Framework of non-fictional Arabic Literature
ZDMG	Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft

- 1 『マカーマート』の文体は、サジュウと呼ばれる押韻散文であると広く理解されてきたが、ビーストンはこの見解に異議を唱えた。彼は従来サジュウの名の下に一括されてきた文章の文体上の相違を精査し、時代毎の変化を明らかにした上で、ハマザーニー作『マカーマート』の文体の特徴は押韻にあるのではなく、パラレリズム（対偶表現）にあると指摘した。Beeston(1971),(1974),(1983),(1990). またホールズはこのパラレリズム表現が現代口語にまで影響を及ぼしているというフィールド・ワークの結果を発表している。Holes. ハマザーニー作品の文体に関してイワニーとゲルダーが論争中であるが、後者の論文のサブタイトルが端的に示しているように、資料から例外を除外して得られた分析結果は説得力に欠けると思われる。Iványi(1993),(1996), Gelder(1999). 筆者も『マカーマート』の文体に関する研究を発表し、この口頭発表に基づく研究を準備中である。「アラブ文学における対偶表現—『マカーマート』に即して」、日本オリエント学会第42回大会（2003年、金沢大学）
- 2 Malti-Douglas(1985), p.247, Beeston(1971), p.1, Richards, p.89.
- 3 リチャーズはマカーマ(maqāma)の語の「立ち上がる」という原義から、「座っている」を意味するマジュリス(majlis)と対比させて、「立って話をする人」→「その人の話」→「その人の話を聞く場所・会衆」への意味変化を引き出し、この語にはこれらの意味が重層的に込められていると説いた。Richards, p.92. Beaumont(1994), p.4. そして立って話をする代表的な人物は説教師(khaṭīb)であり、マカーマート作者達の教化目的という執筆意図とリチャーズの見解は一致する。それゆえマカーマートを座談(séances)と訳するのは誤りである。Beeston(1971), pp.8~9, Jones, pp.229~233, Mattock(1984), p.16.
- 4 ザキー・ムバーラク論文は*al-Muqtataf*(1930)に発表されたが筆者未見。この論文の紹介・評価に関しては以下を参照。Malti-Douglas(1985), pp.248~251, Håmeen-Anttila, pp.64~68, Drory, p.14, pp.34~36.
- 5 ハメーン・アンティラはイブン・ドライドの『雨と雲の描写』中にハマザーニー作品との類似テキストを指摘したが、彼の新説は自ら認めるように説得力に欠ける。Håmeen-Anttila, pp.66~73. このアンワー(anwā')と呼ばれ、ジャーヒリーヤ期にまで遡る星辰暦については, Pellat (1956), Frolov, pp.120~121, 参照。
- 6 土田、50頁~51頁、53頁~56頁。バルトは文学作品理解における作者の特権的な地位を否定するとともに、テキストはジャンル区分を越えるとも主張した。テキストは既成の分類を転覆させる力を秘めているからだ。石井、169頁~171頁。しかし、本稿では「ジャンルの存在を認めないというのは、文学作品は既存の作品群と関係を持たないと主張するに等しい。ジャンルとはまさしく、作品が文学の世界とかわりを持っていく中継地なのだ」というトドロフの位置に立つ。ツバタン・トドロフ、18頁。大浦、33頁~41頁。Orr, pp.97~98, pp.101~102. ジャンルとしてのマカーマート論はキルトが先鞭をつけ、ハメーン・アンティラが網羅的に論じた。Kilito (1976), Håmeen-Anttila.
- 7 間テキスト性の概念は以下の書が簡便にまとめており便利である。土田・神郡・伊藤『現代文学理論』、62頁~67頁、168頁~179頁、土田知則『間テキスト性の戦略』、グレアム・アレン（森田訳）『文学・文化研究の新展開—間テキスト性』。英文ではOrrが、intertextuality, influence, imitation, quotationの章題の下にこれまでの論争をまとめて整理している。
- 8 土田、116頁。
- 9 Droy, p.13. アダブ作品の特徴に関しては以下の書目を取り上げている。Bonebakker(1990),(1997), Malti-Douglas(1985), pp.7~21, Leder, Geries(1998). アダブ作品は題材を歴史叙述の材源として集積された情報（ハバル）を基にしており、情報の伝承過程（イスナード）を重視するハディースに倣う叙述スタイルと相俟って、自由に想像力（=創造力）を発揮したフィクショナルな作品は生み出されなかった。アラブ文学において、文学的虚構を是認する韻文とそれを否認する散文との相違は、このような特異な文化的背景から生じたものである。Geries(1998). ビーストンはアダブ文学の代表であるジャーヒズ作品とハマザーニーの『マカーマート』を比較して、後者

- における虚構性(fictionality)とサジュウ(押韻散文)の増大を指摘している。Beeston(1971)。マトックはビーストンの研究を補訂して、ジャーヒズ、イブン・サッラーム、ハマザーニーを比較考量している。Mattock(1984)。また同じ題材がアダブ作品(ハーティブ・バグダーディー)と『マカーマート』、次章で取り上げる『医師達の宴会』、さらに『千夜一夜物語』へと、どのように変容したのかを考察した研究もある。Beaumont(1993)。
- 10 イブン・ブトラーンの伝記的情報は、*EAL.*, s.v., Ibn Buṭlān (L.I.Conrad), Klein-Franke, pp.1~3, Hāmeen-Anttila, pp.127~128に依る。『医師達の宴会』の使用テキストはKlein-Franke版。
- 11 アラブ文学におけるトゥハイリーのトボスは、Gelder(2000), pp.47~50, Malti-Douglas(1985), Monroe(1983), pp.123~126が扱っている。また「吝嗇漢bukharā'」に関してはマルチ・ダグラスの専著がある。Malti-Douglas(1985), *Structures*。
- 12 Ibn Buṭlān, p.3(of the Arabic text)。
- 13 フイクショナルな作品に対する忌避感に関してはDrory, p.37, Leder(1992), p.34参照。「マカーマート」と動物譚の関係については、Hāmeen-Anttila, pp.89~94, 参照。
- 14 Bonebakker(1997), pp.57~58, pp.69~70。
- 15 ハマザーニー作品中、最も変化に富んだストーリー展開を見せる第22話「マデーラのマカーマ」に、多くの研究者は物語論の観点から注目を寄せている。Malti-Douglas(1985), Beaumont(1993), Gelder(2000), pp.49~51, p.72, Hāmeen-Anttila, pp.106~114, Mūsā, pp.352~355, Monroe(1983), pp.145~160, Shak'a, pp.374~381。岡崎(2001)は主に物語論と言語学的観点からこのマカーマを分析したもの。
- 16 イブン・ナーキヤーの伝記的情報は、*EAL.*, s.v., Ibn Nāqiyā(Drory), S.Wild(1994), pp.435~437, do.(1992), p.77, Hāmeen-Anttila, p.133, に依る。使用テキストはO.Rescher版。
- 17 *Ibid.*, p.123。
- 18 *Loc. cit.*, Droy, pp.22~23, p.25。
- 19 Hāmeen-Anttila, p.134。
- 20 韻文と散文の混交体において、改行せずに詩句を挿入したり、詩を散文化して行文中に書き込んだり、あるいは、注記なしに引用文を挟み込んだりして、作者は自己の知識力を誇示し、逆に受容層(読者)はその謎解きに挑戦する知的ゲームを楽しんだ。Sanni(1998), (1998), Hāmeen-Anttila, p.52, p.217。
- 21 マアッリーのアラブ文学史上に占める意義に関しては'Ā'isha(1990)と*EAL.*, sv., Abū al-'Alā' al-Ma'arri(Gelder)が簡潔にまとめている。また『宥しの書簡』には小高の研究がある。『宥しの書簡』のダンテへの影響に関しては、杉田が広く地中海文化史の立場から概観しているが、その詳細に関してはMonroe(1983), pp.9~10, Abu-Haidar参照。
- 22 使用テキストは'Ā'isha(1975)版。
- 23 Cf, Smoor, pp.44~46, 'Ā'isha(1990), pp.336~337, pp.388~390。
- 24 Hāmeen-Anttila, pp.90~94, Cachia(1970)。
- 25 Moreh(1992), pp.104~118。
- 26 作品名は『タワービウとザワービウの書簡』であるが、注釈によると、タワービウもザワービウもともにジン、あるいはシャイターンと呼ばれる精霊を指し、詩人に靈感を吹き込む働きをするところから『二詩霊の書簡』と訳した。Ibn Shuhayd, p.8, fn., 2, fn., 3。イブン・シュハイドの伝記的情報は、*EAL.*, sv., Ibn Shuhayd(Alvarez)とMonroe(1971)に依る。使用テキストはBuṭrus al-Bustānī版である。これに関する研究は、Mūsā, pp.388~407, Hāmeen-Anttila, pp.219~229。またイフサーン・アッパースはマアッリー『宥しの書簡』と『二詩霊の書簡』の比較を行っている。'Abbās, pp.203~228。
- 27 ジンと詩人の関係はアラブ古典詩を扱う多くの書が言及しているが、概説書では以下の書が挙げられる。Nicholson, pp.72~73, Gibb, pp.18~19, Tayib, p.41, Jones, vol.1, p.1。専門書では、Montgomery, p.27, Lyons, VIII~X, Zwettler, pp.156~159。論文では、Ch.Bürgel, Bodman参照。またセルは古典詩に現れるゲール(ジンの一種)と後代の民間伝承におけるその存在を区別する必要があると説いている。Sells, pp.161~162, fn., 14。
- 28 Hāmeen-Anttila, p.220, Mūsā, pp.400~408, Elinson, pp.4~5。

- 29 Ibn Shuhayd, p.128, Ḍayf(1954), pp.30~31.
- 30 Orr, pp.92~93, p.95, 土田・神郡・伊藤、170頁~171頁、土田、96頁~101頁。
- 31 al-Sharīshī, vol.1, pp.12~48, De Sacy, tome 1, pp.2~14, I. Sābā, pp.9~15, Chenery, pp.103~107.
- 32 Orr, pp.83~85, 土田、54頁、64~66頁、土田・神郡・伊藤、172頁~173頁。
- 33 Hāmeen-Anttila, p.149.
- 34 Hāmeen-Anttila, p.161, Droy, p.13. 岡崎 (2002) はハマザーニーとハリリーーの『マカーマート』の異同を考察したものである。そこでは両作品における語り手の位置とその役割に注目している。
- 35 Shak'a, p.418, Ḍayf(1954), pp.64~67, Hāmeen-Anttila, pp.156~158. ハリリーーの『マカーマート』をアラブ文学の精華と見なし、その作者を神格化する動きは、「ハリリーーの『マカーマート』各行は、黄金で綴られるのに値する」と述べたザマフシャリーーに始まり、「『マカーマート』は『コーラン』に次ぐアラビア語著作として高い評価を受けてきた」と注するシュネリーーを経て現代にまで及んでいる。ギブ、186~187頁、Ebied and Young, Nicholson, p.336.
- 36 ハリリーーは生前、既に自作に注釈を付したり、またその講義を行って終了免許状(ijāza)をも発行していた。Hāmeen-Anttila, pp.173~175, Droy, p.13, fn.4.
- 37 Hāmeen-Anttila, p.178. 特にハリリーーに倣って50話に纏めるのが慣行となった。近代においてヤージジーはハリリーーに挑戦すべく10話を足して全60話からなる『マカーマート』を書き上げた。このことに関してリチャーズは、ハマザーニーの現行テキストが52話という中途半端な数で纏められているが、その内容からして、元来第20話までのものを、後世、ハリリーーの作品数と合致させるために、ハマザーニーのリサーラから残余を拾いあげたのだ、とする斬新で説得力に富む説を出した。この説に従うと、ここにもアンチ・クロノロジカルなハリリーーの影響が考えられる。Richards, p.98. Hāmeen-Anttila, p.176, p.206. また50という数に関して、ハリリーーの没後最も早くマカーマートを書いたと思われるハナフィーは、その30話から成る『マカーマート』序文で、「自作はモーゼの30話に倣ったものであり、40でもなく、二人の先人の50でも20でもない」という興味深い記述をしている。Hāmeen-Anttila, p.192. またフワーズミーとの文学競争において、ハマザーニーが400のマカーマを書き上げたと言った逸話に関して、ビーストンは、古代の近東において40という数字は漠然と多数を示す表現であると断じて、広く人口に膾炙している以下の例を挙げている。イスラエル人の荒野での40年間の放浪、イエスの40日間の断食、ギリシャ正教会の40人の殉教者、アリババと40人の盗賊、トルコ民話の40人の大臣。Beeston(1971), p.12.
- 38 「間テキスト性」の理論と密接な関係を有するのがブルームの提唱した「誤読理論」である。ブルームは「間テキスト性」の議論から導かれた、「後続の者は常に先行者の「影響の不安」を感じ取り、誤読の可能性にさらされている」と説いて多大の反響を巻き起こした。土田、80頁~92頁、土田・神郡・伊藤、170頁~171頁、土田・青柳、22頁。Orr, pp.61~69. 筆者も別稿において、ハマザーニーとハリリーーの、それぞれ娯楽目的と教化目的という執筆の意図の相違から、後続のハリリーーがハマザーニーを誤読し、そこに含まれていた豊かな物語性がハリリーー作品には失われてしまったことを立証した。岡崎 (2002年)。Droy, p.32. Allen(1997), p.4, アレン、17頁、47頁、88頁。
- 39 クリステヴァ、61頁~62頁、Orr, pp.133~134. 土田、57~64頁、148頁、157頁、丹治、18~21頁、アレン、43~45頁、88頁。
- 40 土田の引用による。50頁。
- 41 詩歌優勢のアラブ文化において、ジャーヒズ作品や『千夜一夜物語』に関する研究を除いて、散文文学の研究は概して低調で、レーダーとキルパトリック共著論文のタイトルが示すように、未だ、全体の見取り図(sketch map)を作成するため、残存作品の検証作業が始められたばかりである。Leder & Kilpatrick. Cf., Cheiko-Mousa et al., Ghazi, Jones, Bonebakker(1997). 西暦9~11世紀頃のアラビア語の文体に関しては以下の書目を参照。Pellat(1956), Mubārak, Beeston(1977). またハマザーニーの『マカーマート』の文体に関してはIványi(1993)が簡潔にまとめている

- が、同時に(注1)をも参照。
- 42 Orr, pp.137~140. アレン、244頁。
- 43 Hämeen-Anttila, p.34. シャクアはハマザーニーのリサーラを、第2章(文例)、第3章(文体)、第4章(フワーリズムーとの比較)において論じている。Shak'a, pp.179~297. 近代において評価が一転するまで、ハマザーニーは『マカーマート』作家としてよりは、リサーラ作者として名声を博しており、その端緒は、当代随一と評されていたフワーリズムーとの文学論争において勝利を収めたからであった。Zakī Mubārak, pp.325~356, Rowson, p.669, Ḍayf, p.32, Hämeen-Anttila, pp.34~36, pp.87~88.
- 44 Beeston (1977), pp.26~27.
- 45 M. 'Abduhu (ed.), p.18, 'Abd al-Ḥamīd (ed.), p.25, Prendergast (trans.), P.35,
- 46 Hämeen-Anttila, p.46, pp.87~88. アラビア語散文はウマイヤ朝以後、外交や統治の必要上から急速に発展し、その主な担い手は書記官僚達(kuttāb)であった。彼らは書記術(inshā')を開発するとともに、リサーラにも筆を染め、自己の博識と文章力を誇示した。この間の経緯は「書記術はアブド・アルハミード(750年?没)に始まり、イブン・アルアミード(995年?没)に終わる」とイブン・ハッリカーンが記す押韻句が端的に示している。Latham, p.166. Hachmeier, pp.131~140. Leder (1992), Kilpatrick (1991), p.8, Schönig, Zakī. 書記官僚達(kuttāb)とアブド・アルハミードに関しては、Latham, Bosworth (1990), 参照。イブン・アルアミードに関しては、Pellat (1990), 参照。
- 47 Shak'a, p.363. ハマザーニーの『マカーマート』テクストの成立過程に関しては資料に欠け、確たる情報はないが、現行のムハンマド・アブドゥフ版の第51話「ビシュルのマカーマ」、第52話「ライオンのマカーマ」は、mulah (笑話)という呼称、その最後尾に配されている位置、文体、内容からして、ハマザーニーのリサーラから『マカーマート』に後世挿入されたものと考えられている。Richards, p.95, Beeston (1971), p.12, Hämeen-Anttila, p.34, pp.77~80, Abu-Haidar, pp.77~80.
- 48 注8参照。ビーストンはほぼ同時代のタヌーヒーとハマザーニー両作品を比較して、ハマザーニーの斬新さ(originality)を文体と作為性(fictionality)に見出している。Beeston (1971), pp.8~10. またマトックはジャーヒズとハマザーニーの密接な関連を指摘している。Mattock (1984).
- 49 Hämeen-Anttila, pp.75~80, Beaumont (1993), p.139, Allen (1998), p.246, Leder and Kilpatrick, p.2, Bonebakker (1990), pp.27~30.
- 50 注(47)参照。ハモリはタヌーヒーの『難事の後安堵』において、一つの歴史事象が複数収載されているのに注目して、その作業における作者の「物語」や娯楽性への意図を考察している。Hamori.
- 51 サアーリビーはこの「冗談と真面目」という評語で、ハマザーニーの『マカーマート』の特質をまとめている。al-Tha'ālibī, vol.4, p.257. 娯楽性を志向する「冗談と真面目さ」に関しては、Gelder (1992), Leder (1998), p.56, 参照。論争文学に関しては、EAL, sv., debate literature (Gelder), *ibid.*, s.v., mahāsin wa-masāwi, (Sadan), Geries, Gelder (1987), Hämeen-Anttila, p.269, Reinink (ed.) 所載の、Gelder, Heinrichs, Leemhuis, Mattock, 各論文参照。
- 52 ハマザーニーは第39話「ニーシャープールのマカーマ」において、偽ハッジをモチーフに話を展開させており、第49話「葡萄酒のマカーマ」では、イスカンダリーが扮するイマームが、寺院での説教後、直ちに酒屋に駆け込み飲酒する光景を描いている。
- 53 イスラム文化圏に広く伝播したカスィーダ(定型長詩)の影響に比して、マカーマートのアラブ世界外への影響はアンダルシアのヘブライ語による著作を除いて稀であった。その最大の理由として、マカーマートが高度にアラビア語を駆使した作品であり、一部の知識人を除いてその読解、享受は不可能であったことが挙げられる。マカーマートは万人に開かれた作品ではないし、口承で伝わるものでもない。ハリリー作品に頻繁に見られるタドミン技法や、時にアクロバチックと評される叙述法が示すように、マカーマートは明白に口承を脱して書記の段階に入った文化が生み出した作品である。マカーマートは受容層(読者)が作者と同程度の教養(アダブ)を有しているのを前提に成立している文学であった。

- 事実、ハリリーは自己のアラビア語運用力を誇示すべく、第28話「サマルカンドのマカーマ」では、アラビア語のアルファベット中、上下に点が付される文字を全く用いない文を書いたり、第6話「マラーガのマカーマ」では交互に点を持つ文字を並べるアクロバチックな文を作り上げている。Hämeen-Anttila, p.167. また全編にわたり、全くかけ離れた意味を持つ単語を使って、二様に解釈可能 (tawriya) な文を作り、言葉遊びを楽しんでいる。カスィーダの伝播に関しては浩瀚な Sperl and Shackle が網羅的で、その広がり一望できる。アンダルシア・ヘブライ文学へのマカーマートの移入については、Droy, pp.126~157, と Hämeen-Anttila (シッパース執筆)、pp.297~327, Monroe (1983), pp.7~18, pp.164~168, がまとめている。またマカーマートのピカレスク・ロマンへの影響はハイダルが論じている。Abu-Haidar. そして、カスィーダの衰退とマカーマートの興隆を文芸擁護者の存在から論じたのが、J.T.Monroe and M.F.Pettigrew 論文である。
- 54 アレンの表現。Allen (1998), p.5. ハリリー以後、近代 (18世紀) に至るまでのマカーマートの歴史はハメーン・アンティラの第9章 (pp.328~364) が網羅的である。
- 55 Hämeen-Anttila, pp.179~183, Allen (1997), p.273.
- 56 R.Allen (1998), p.6. ハーフイズは近代アラブ文学創出の動きを「マカーマの再生 (revitalization of the Maqāmah)」にとらえ、文芸復興期の活動を「マカーマの再活性化 (rejuvenation of the Maqāmah)」と評している。Hafez, pp. 108~111, pp.129~136. 19世紀より現代に至る「マカーマート」への関心、実作は、Allen (1998), pp.6~13, do.(1997), pp.121~123, Brugman, pp.69~77.
- 57 従来、『マカーマート』を「悪漢小説」とか「ピカロ」ものに準える傾向にあったが、トファイリー同然の食い逃げ (第12話、第46話) や、言葉巧みに死人を蘇生させると持ちかける悪事 (第21話)、あるいは難破の不安に戦く乗船客に、効果の怪しい護符を売りつける姿 (第23話)、さらに犯罪の数々の手口を描く (第30話) 等、ハマザーニー作品には該当しても、文化人の理想像 (insān kāmīl, homme parfait) としての主人公像を描き出しているハリリー作品に関しては、全く見当違いの評語である。ハリリー作品において、主人公のアブー・ザイドは博識を基に万能の才を発揮する。Kilito (1978), p.36
- 58 ブルームは『影響の不安』において、フロイトを援用して、「詩のテキストと先駆者の詩ないし一連の詩との間にできる「誤読」の諸型を、間テキスト性の観点から評価する。」アレン、166頁。換言すれば、ブルームは、「読む者 (そして書く者は)、常に先行者たちの影響に震えをおののいている。こうした「影響の不安」を回避するためには、先行者たちを意図的に誤解=誤読することで彼らの安定性=権威を揺るがし、そこに新たな読みの可能性を探るしかない」という誤読理論を立てた。土田・青柳、22頁。後続の者がハリリーを越えようとして様々な試みをし、時代を経るごとにジャンルとしての「マカーマート」が曖昧になっていくが、それらの営為を誤読理論の観点から考察するのは有効なアプローチ法であろう。つまり、マカーマートと冠された作品内容の多様さは、書き手が唯一のモデルと仰いだハリリー作品のどの部分をマカーマートの本質と理解したのか、という解釈の多様性に起因している。「書くこと」は「読むこと」と密接に関連しているのだ。土田、116頁~120頁、126頁。
- 59 タイトルの「双海の合流点 majma‘ al-baḥrayn」は『コーラン』18章60節に出てくる表現であるが、「双海」はこの場合、アスカリー (1005年? 没) の『書記と詩の二技芸書 (Kitāb al-Ṣinā‘atayn al-Kitāba wa-al-Shi‘r)』と同じく、散文と韻文を指し、自己の知識を誇示し、教化を目的とするヤージーの著作目的を良く示している。Allen (1997), p.119, do.(1998), p.275. 彼のマカーマートへの関心の一端は、ハリリーの『マカーマート』研究で著名なドゥ・サシーに、その著作の誤りを指摘する書簡を送ったことにも示されているし、またハリリーを凌駕すべく60のマカーマを書き上げた点にも現れている。cf., EAL, sv., al-Yājījī, Nāsif (P.C.Sadgrove).
- 60 シドヤークの評価・意義に関してはバグダディとベレド参照。al-Bagdadi, Peled. ムワイリヒーに関してはアレンが精力的に研究している。Allen (1970),

(1997). Do. (1998). *Literary*, p.8.

- 61 奇しくもアレンも「影響の不安anxiety of influences」という用語を用いてシドヤーク以後のマカーマート作者の活動を締めくくっている。Allen (1998), *Literary*, p.13. 文芸復興期（ナフダ）以後、現代に至るまで書き継がれているマカーマート・ジャンル作品については、アレンが「マカーマ精神 *maqāma spirit*」の継続と評してまとめている。Allen, *ibid.*, pp.9~13. また皮肉なことに、ムワイリヒー作品は教科書として採用されることにより、その批判精神の牙を抜かれる、というハマザーニー作品に似た運命を辿ることとなった。このように作品は作者の手を離れて、時代の推移とともに、様々に解釈され、誤解に曝されつつ受け継がれていく。注60の文献参照。